

主婦とオルタナティブ労働：二元論的分離の間にある典型的でない労働に注目して

里村，和歌子

<https://doi.org/10.15017/1831393>

出版情報：九州大学，2017，博士（比較社会文化），課程博士
バージョン：
権利関係：

氏名	里村 和歌子				
論文名	主婦とオルタナティブ労働 —二元論的分離の間にある典型的でない労働に注目して—				
論文調査委員	主査	九州大学	教授	三隅	一百
	副査	九州大学	教授	鏑木	政彦
	副査	広島市立大学	教授	直野	章子
	副査	関西大学	教授	大和	礼子
	副査	広島修道大学	教授	河口	和也

論文審査の結果の要旨

本論文は、男性中心の資本主義労働にもとづく公的領域／私的領域あるいは生産労働／再生産労働のような二元論的枠組みで捉えきれない「主婦」の諸活動に着目し、それが公／私間のグレーゾーンに位置しながら労働（オルタナティブ労働）としてもつ可能性を、実証的に論じたものである。とくに、彼女たちが男性中心の資本主義に従属的な位置に居ながら、そこから離れようとしないう理由を丁寧に析出し、彼女たちが実践するオルタナティブ労働がフェミニズム的自立とは異なる自立のあり方を示唆することを論じている。

内容は以下の通りである。第1章では、ウーマン・リブ、エコロジカル・フェミニズム、生協運動等の反近代主義的主婦論の系譜を追い、それに対する批判の論点を整理する。そして、女性の自立を唱えるフェミニズム思想やジェンダー論が、生活・経済・社会に多面的に関わりながら主婦たちが行う諸活動の意義を汲み取れないことを確認する。そこで、従来の議論が陥りがちな公／私二元論的な区分の間に、オルタナティブ労働というグレーゾーンを設定する枠組みを導入する。この枠組みのもとで、以下、質的調査にもとづく3つの事例分析を行う。

第2章ではハンドメイド作品を制作・販売する「作家さん」26人に対するインタビュー調査および参与観察にもとづく考察がなされる。彼女たちは手芸／芸術／商品の狭間にある周辺の市場で、小銭をかせぐ。必ずしも独立して自分の店舗をもつことをよしとせず、業者との委託請負も避け、売れ行きが伸びて作品が足りなくなると「生産」をやめてしまう。そんな「作家さん」たちが、一定のファンを獲得し「産直」的付加価値をもって生き生きと周辺の市場を闊歩する姿（そしてそこに惹き込まれる男性たちの姿）を描き出す。

第3章では、子育て支援のソーシャルビジネス「バンビの木箱」代表かつ発起人の企業家女性をとりあげる。収支的には事業拡大が可能であるにもかかわらず、この団体は法人格を取得せず、もっぱら行政関係の事業を請け負う。彼女は、利潤にこだわらず、自分を含め皆が何かしら「得する」活動を行うという経営方針を崩さない。そして、出資している福岡中小建設業協同組合もその方針に理解を示す。こうして、「もう倍働けるけど…ゆとりをもって」と公／私の折り合いをつけた事業経営の事例を示す。

第4章では「福岡市地域ぐるみ家庭教育支援事業」という行政が支援する地域活動事業に踏み込んだ主婦たちを取り上げる。同じ事業活動に携わる2グループのうち、一方はママ友同士の水平的な関係のもとで持続的に活動を行うことができた。しかしもう一方のグループの主婦たちは、年

長男性リーダーのもとで活動の仕方が雇用労働のようにコントロールされることに悩み、それを補う対価を見いだせないまま、2年で活動を止めるに至った。彼女たちの地域活動を思考実験的にオルタナティブ労働としてみることで、公／私の折り合いとして地域活動がもつ意味を再考する。

以上の事例分析をふまえて第5章では、そもそも彼女たちがオルタナティブ労働を選択し、公私の縁に居続ける理由を、主観的な利害意識の観点から掘り下げる。そして彼女たちが、安定した賃金が保障されるが非自律的な労働形態よりも、報酬対価は低くても自己裁量が大きいオルタナティブ労働の優位を無意識的に嗅ぎ取っていることを読み取る。そこに表れるのは、彼女たちがプライドや自己承認を満たしながら、主観的には合理的選択として説明できる形で、公私の折り合いをつけている姿である。

以上のような本論文の第一義的な価値は、ともすればひとくくりに扱われがちな「主婦」が、生活・社会・経済に幅広く関わる形で多様な活動を展開している姿を、質的調査によっていねいに描き出した点にある。とくに「作家さん」は階層的かつジェンダー的に二重に周辺化された縁にいるが、そこで彼女たちがみせる生の実践は、その縁が単に被抑圧の場としてではない「主婦」の生き生きとした居場所となりえていることを示しており、興味深い。他の2事例は公／私間のグレーゾーンの中での位置づけが「作家さん」とは異なるが、周辺における生の実践という点では収斂するところがある。その収斂先に突き当たるのは、本来労働の喜びが何であったか、そしてその喜びを現代経済システムおよびジェンダー構造の中でどのようにして獲得しうるのか、という本質的問いである。社会関係資本を駆使してプライドや自己承認を満たしながら、決して経済的自立に回収されない公私両立的な「労働」に関わる「主婦」の姿は、そこにおいて一定の可能性としてみえてくる。

このように本論文は公／私の縁にいるからこそできる女性たちの多面的な諸活動を描き出し、その意義を「オルタナティブ労働」として、公／私を規定する抑圧構図を突き破るでもなく、かといってそこに閉ざされるのでもない、まさに縁における生の実践の中に見いだそうとしたものである。この研究が示した「主婦」の多様性とその意味に関する議論は、学術的にも社会的にも意義多いものであり、博士（比較社会文化）の学位に値すると判断される。